

## 巻頭言

城生佰太郎先生は、本学の開学直後から非常勤講師として本学第一学群人文学類で音声学概論、言語学概論、音韻論を、1975年からは大学院博士課程文芸・言語研究科で言語学特講 B (アルタイ語) を担当されました。1979年に音声学概論の教室で私が初めて先生にお会いしたとき、先生は前任校の東京学芸大学から毎週はるばる桜村までお出ましになる若くダンディーな非常勤講師でありました。私は教室で、まずアナウンサーのように歯切れのよい先生の語り口に魅了され、次に音声と言語の未知なる世界への学問的興味をかきたてる工夫に満ちあふれた授業に引き込まれていきました。この授業を通し、私はことばを記述する喜びを生まれて初めて味わい、これが自分の生き方を決定づけるひとつの要因となりました。その後、人文学類および文芸・言語研究科の在学中は学生として、私が本学に着任した2000年からは職場の同僚として、先生にはひとかたならぬお世話になり、また先生から多大な影響を受けました。そのような者として、個人的な感謝も込めて巻頭のことばを述べさせていただきます。

城生先生は、1980年に本学文芸・言語学系に着任し、1989年に助教授、1997年に教授となられ、本年3月で定年をお迎えになります。本学に奉職した28年の間、城生先生は研究・教育・社会貢献の各方面でまさに八面六臂の多彩な活躍をされました。その詳細は2006年に上梓された城生佰太郎博士還暦記念論文集『実験音声学と一般言語学』（東京堂出版）の12-48ページおよび本誌v-ixページに収録されておりますので、そちらをご覧ください。ただそれだけでいいと思います。

城生先生が在職中に本学と学界に対して果たした貢献は多岐にわたりますが、その中からあえて3点を選ぶとすれば、①音声実験室を整備したこと、②優秀な実験音声学者を育てたこと、③真に実証的でボトムアップ型の学風を確立したことを挙げることができるでしょう。以下、これら3点についてももう少し詳しく述べたいと思います。

①音声実験室の整備：本学人文社会学系棟には B613 という実験室があります。実は、着任前の城生先生がこの部屋の設計に際して大きな役割を果たし、B613 は本格的な録音や音声実験にも耐える防音シールドルームを備えていました。この部屋をシールドルーム仕様にしたのは城生先生の機転からだったと聞きます。私は学生時代にも B613 に何度か足を踏み入れています。当時この部屋には東京教育大学から引き継いだサウンド・スペクトログラフを初めとする実験装置が置かれていました。しかし、それらを活用していたのは城生先生お一人だったようです。先生は 1981 年から B613 の管理責任者となり、大型の外部資金を獲得して、1883 年にはエレクトロ・パラトグラフィーを購入し、1996 年にはこの部屋に脳波計を設置されます。脳波をきれいにとるには脳波計をシールドルーム内に設置する必要がありますが、先生の機転で B613 をシールドルーム仕様にしてあったのが、期せずしてこの時に役立ったこととなります。以来、B613 音声実験室は事象関連電位を用いた聴覚音声学的研究の分野で日本を代表する拠点となったと言っても過言ではありません。この実験室から生み出された研究の歴史については、山崎修一氏が『実験音声学と一般言語学』の 291-298 ページにまとめていますが、これを見ると、城生先生がこの実験室を整えられたことの意義の大きさをあらためて実感します。2004 年には、同室に視覚刺激発射装置が設置され、文字認知に関する実験も可能になりました。この実験室を今後もできるかぎり有効に活用し、先生が築かれた研究拠点をまもっていきたいと思います。

②優秀な実験音声学者の育成：城生先生は在職中に音声学に関心を有する数多くの大学院生を専攻や領域の壁を越えて指導されました。そして、一般言語学研究室から実験音声学を専門とする課程博士が 4 名生まれました。それぞれの博士論文の題目は下記の通りです。

- 金 善姫「韓国語大邱方言の韻律の研究：音響音声学的観点からの分析」(1996 年)
- 福盛 貴弘「トルコ語の母音調和に関する実験音声学的研究」(2003 年)
- 高 慧禎「韓国語のアクセントに関する実験音声学的研究：音声学的アクセントの実体を探る」(2005 年)

● 宇都木 昭「朝鮮語ソウル方言におけるアクセント句：音響分析による再検討」(2005年)

現在、金氏は大韓民国水原大学校人文大学東洋語文学部助教授、福盛氏は大東文化大学外国語学部専任講師となっています。高氏は大韓民国東国大学校日語日文学科で教鞭をとり、宇都木氏は日本学術振興会海外特別研究員(英国エディンバラ大学)を経て理化学研究所脳科学総合研究センターの特任研究員となりました。言語学に比べて音声学、特に実験音声学の専門家が極端に少ないことを鑑みると、それぞれの道で活躍する優秀な実験音声学者を4名も輩出した功績は絶大です。今後は、4氏が中心となって“critical mass”を形成し、城生先生の学問を受け継ぎ、吟味し、熟成させ、その成果を次の世代へと伝えていってくれるものと期待しています。

③真に実証的でボトムアップ型の学風の確立：合理的仮説と内省に立脚する言語学が一世を風靡した時代から今日に至るまで、城生先生が方法論においてもっとも重視し、授業や出版物の中で口癖のように繰り返されてきたキーワードが「実証」と「ボトムアップ」の2つです。私自身は文献言語の歴史研究が専門ですので、一次資料による「実証」については筑波でもイスラエル留学中も諸先生方からたたき込まれた経験をもちます。また、イスラエルでは主にアッカド語文化圏の辺境でアッカド語を母語としない書記によって書かれたアッカド語の研究に従事したため、メソポタミア本土のアッカド語という眼鏡を通して「トップダウン」的に捉えると考えてこない言語現象を「ボトムアップ」的に記述する姿勢を貫いてきました。そのため、自分としては城生先生とこれら2つのキーワードを共有していたつもりでした。けれども、3年ほど前から先生の脳波実験を見せていただくようになって、先生のおっしゃる「実証」と「ボトムアップ」が、私が考えていた以上に深いものであることに気がきました。城生先生は「言語音の究極の目的は何か?」と問い続け、「それは、聞き手の脳を発火させて、発話者から出力された音声を聴覚器官で受容して情報処理し、意味理解することにほかならない」という解にたどりついたといっています(『一般音声学講義』, p. 64)。つまり、城生先生にとって、真の実証とは言語事象の中にあるのではなく、脳神経科学的な根拠を得ることにほかなりません。脳神経科学的な根拠を真摯に追求すると、自然科学よりも自然学に近

づき「ボトムアップ」も筋金入りのものとなります。「何が出てくるか分からない」という前提で事象探査型の基礎実験を重ね、奇妙な結果が出てきても「あるものはしょうがない」という精神でこれと向かい合います。さらに、脳の神経活動は個人差が避けられない「差異の体系」であるため、ラングレベルの一般化を急がず、1人の被験者の1回1回の脳神経活動を虚心坦懐に観察します（『実験音声学入門』, p. 7-15 参照）。私は、この真に実証的でボトムアップ型の学風に目から鱗の落ちる思いで接して胸を打たれるとともに、この精神が門下生に浸透していることに感動を覚えました。昨年8月には、「日本実験言語学会」という新学会が設立され、この学風が学会という形で結実したことも特筆に値します。城生先生が4月から文教大学教授となられることもあり、城生学派の精神は今後も一大学の枠を越えて波及していくにちがいありません。

最後に、城生先生から受けた学恩に対して本誌寄稿者を代表して心よりお礼を申し上げますとともに、先生のご健勝とますますのご活躍を祈念して、巻頭のことばに代えさせていただきます。

2009年2月27日 池田 潤